

安藤直太朗監修

名古屋 三国伝記研究会編

三國傳記

△平仮名本▽下

古典文庫

安藤直太朗監修
名古屋 三国伝記研究会編

三國傳記

△平仮名本▽
下

古典文庫

古典文庫第四三八冊

昭和五十八年三月二十日印刷発行

非売品

編者 名古屋三国伝記研究会

発行者 吉田 幸一

記 伝 国 三
下

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

三国伝記卷十二……………	五
三国伝記卷十三……………	七
三国伝記卷十四……………	二七
三国伝記卷十五……………	一八一
書誌・解説……………	渡邊信和……………二六五
板本・平仮名本対照表……………	二八五

三
国
伝
記

△平仮名本▽
下

安藤直太郎蔵

三国伝記卷第十二目録

もくれんそんしや はふせいたいによ
目連尊者並母青提女の事

ふつほう
仏法、かんとにわたる事

いはふちてら
石淵寺の八かうの事

(ママ)
たいせたいし
大陀太子、龍宮の如意珠をこひ給事

みいてら
三井寺のなき不動の事

しかい
持戒のひくの事

ねいかう さいへん
禰衡か才弁の事

こつしぎ あまゑいか
乞食の尼詠歌の事

か たま
鵝と云とり、玉をのみし事

観くわん音おんれいけんの事

栗田あはたの左大臣さたいしん、くらまの御利生りしやうの事

善知識ぜんちしきのすゝめによつて、臨終りんしゅう正念しやうねんに成し事

善無畏ぜんむい三蔵さんさう、胎藏たいさうかいのまんだらをもて、かんとにわたりし事

園城寺おんじやうしの長吏ちやうり明尊僧正めいそんそうしやう、天台座主てんたいさすにふせられし事

金剛智三蔵こんかうちさんさう、金剛こんかうかいのまんだらをもて、唐土とうとにわたりし事

まんだらのかんをうの事

平灯内供へいとうないくとんせいの事

尸毘太王しひたいわう、はとにかはり給し事

山臥延好やまふしえんかう、越中えつちうの立山たてにて亡者もうしやに逢あひし事

ひゑいさん玉泉坊きよくせんはうの事

男^{おとこ}山にまいりきせいして幸^{さいはひ}を得たる女^{によしやう}性の事

三国伝記卷第十二

目連尊者並は青提夫人の事

〔卷二——一話〕（板本九——）

仏弟子摩訶目犍連羅耶、唐には奢木菽氏と翻す。王舎城の傳相長者の子、母は青提夫人なり。その名をらほくとせうす。しかるに、ちゝの長者死去してのち、らほく三年のをもとけおこなひ、はゝにかたりていふやう、ちゝ没後にあませるところのたから、むなしくといへとも、いま錢貨三千くわんあり。これをみつにわけて、一分をは母に奉る。一分をは、ちゝけうやうのために、三ほうをくやうし給へて、おなしく、はゝにあつけ奉る。一分をはらほく身にしたかへて、

しやうはいのために、金地国こんちにおもむきけり。

さるほとに、青提夫人、我子のらほく、たこくへおもむきしかは、ひとへに、かれか申せしことはをたかへす、僧をしやうし、経をよみ、仏をくやうし奉り、亡父のもつこをとふらひはへるへきところに、あへてその心さしなくして、常、魚にくしゝとりをしよくし、ゆうえんけらくにほこりつゝ、月日をゝくりけり。こゝに、らほく、をん国へめくりてしやうはいするに、すてに三とせに成にけるに、一千貫のせに三千貫になりしかは、こきやうもこひしく、はゝにもあひまみえ奉らんと、思ひて、本国に帰りけり。道中より、やくりと云つかひ人を、さきさまへかへして、此よしをつけ申時に、はゝのめしつかひ給金支こんしと云女、せいたいによに申やう、郎君ろうくんすてにかへり給とて、やく

り、さいたつて、きたりぬと。せいたい女、きゝてにはかにあはてさはきて、仏たんをかまへ、くもつをそなへて、みつから仏前にむかひ、ねんしゆす。やくり家に入て、郎君^{ちやくくん}すてにかへりたまふと申つゝ、また、いてゝ道にむかふ。らほくにあひ奉りかしこまつて、はゝ君、三ほうを信し給ひし事をかたり、らほく、大にかんし、よろこんで、はゝの居まするかたにむかつて、らいはいをなす。おりふし、きんりんのともから、あまたきたりあつまり、かたはらに有しか、これを見て、前にほとけなし。なにをらいするそと、とひければ、わかはゝの三ほうをくやうし給ことをきゝて、たつとくおもふて礼する也。みな人の云、なんちのはゝは、つるに三ほうをくやうせしことなし。あけ暮、魚鳥酒^{きよてうしゆ}にくにあきみち、ゆふえんけらくをことゝす。是をみ

るものはいくみ、これをきくものはそしる。何そ、をろかに礼するや
とあさけりしかは、らほく、此よしをきゝて大きになけきかなしみ、
いきたえたふれしぬ。此事、はゝのもとへきこえしかは、おとろきて
はしりいたりつゝ、さま／＼にいたはりしかは、やかてよみかへり
ぬ。せいたい女は、諸人の我子^(わこ)あしさまにいひきかせし事をきゝて、
我子の心をやすめんために、せいこんをなしていはく、なんち、たこ
くにありし間に、我、僧にふせし、仏をくやうせしこと、をこたりな
し。もし、此事いつはりならば、我、則、七日かうちにいのちをはり
て、たちまちに、ちこくにたさいすへしと。らほく、此せいこんをき
ゝて、おそれをなし、はゝともに家にかへりぬ。かくて、七日にあた
る日、はゝ、せいたい女、にはかに死はうす。らほく、大になけきか

なしめともそのかひもなければ、のへにをくりて、はふり奉りぬ。三年のあひたは、ふんほのあたりを立さらす、ねんころにけうやうをつとめけり。

そのうち、きしやくせんにまうて、仏にまみえ奉りまうさく、われ、すてに父母をうしなひはへりぬ。ねかはくは出家して、仏につかへ奉らん。世尊きこしめしてのたまはく、なんえんふたいのうちに一男一女有て、仏にしたかつて出家せは、八万四千のほうたうをつくりたらんくとくにすくれ、けんせの父母ふくらくすること、百年、七代のせんそ、まさにしやうとに生すへし。いかにいはんや、みつからほたいしんをおこしぬるをやと。則、あなんにおほせて出家せさしめ、その名を、目鍵連もくけんれんとなつけらる。さるほとに、目連、仏につかへ奉り、く

しゆれんきやうおこたりなし。つるに、けんわくしよくをたんし、神通をえたまひしかは、十大御弟子につらなつて、神通第一のもくれん尊者と申けり。

さるほとに、目連は、わかはゝの青たい女、いつくにか生をうけておはすらんと、心もとなくおもひつゝ、三かい六道をあまねくへめぐりて見給ふに、すてに、かき道におちて、くるしみをうけ給。そもく、かきのくるしみは、うえつかれかなしむ也。たまたま水をみてのまんとすれは、ほのほとなつてのんとをやく。このみをみてとらんとすれは、つるきと成て身をきる。はらのふくれたる事は、大海のことし。しゆみせんをくらふとも、あくへからず。くちのせはき事は、はりのみゝすのことし。けしをのむともいるへからず。されは、七度までう